

スポーツを分析する社会学的理論に関する一考察

呉, 炫錫
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494630>

出版情報：比較社会文化研究. 19, pp.13-20, 2006-03-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



スポーツを分析する社会学的理論に関する一考察

オ ヒョン ソク
呉 炫 錫

1. はじめに

本稿は、スポーツから浮上している様々な社会的問題がどのように研究されてきたのかを検討したものである。スポーツに対する社会的分析は、様々な理論に基づき、多様な研究が行われてきた。本稿では、Marx、Weber、Eliasの理論に基づいて議論したものを中心にレビューする。勿論、スポーツに関する社会学研究がこの三つのスタイルを中心に行われてきたとはいえない。ただし、スポーツを分析することにおいて、どのようなアプローチがあり、どのような研究結果があったのかを調べる。こうした過程を踏まえ、最後は、Pierre Bourdieu のハビトゥスによるスポーツの分析について論じる。

2. Marx 理論に基づいた議論

ここでは、次の二つの研究方向に注目する。一つは、スポーツを経済的構造の産物とみなし、スポーツが持っているイデオロギー性を強調する立場がある。Hock、Brohm それから Rigauer などがこうした立場である。もう一つは、Gramsci のヘゲモニー論に基づいて、スポーツもヘゲモニーとして分析したものである。Naison と Stoddart などがこうした立場である。

さて、Marx は、スポーツに対する著述を残していないが、他の学者たちが彼の理論を解釈し、スポーツの政治・経済的な有用性に対する議論を提供している。周知のように、Marx の理論の主な主題は、階級の問題ともいえる。Marx の理論に基づいたスポーツ学者の議論は、大きく二つに分けられる¹⁾。一つは、フランクフルト学派の批判理論に影響を受けたものであり、もう一つは、イタリアの Marx 主義者である Gramsci の理論を背景するものである²⁾。しかし、この二つの思想は、共に生産手段をめぐる分裂を核的なものとみなしている。すなわち、スポーツを階級の

枠として分析している。それでは、Marx 理論に基づいてスポーツを論じた先行研究に触れてみる。

先ず、Hargreaves は、資本主義におけるスポーツの主要な機能を次の四つに区別している。

「第一、組織スポーツは、「従順な労働力」を養成することを助ける。スポーツは、労働階級が現代的生産で要求する規律を受け入れるように助長する。

第二、スポーツは、完全に商業化され、市場の力によって支配される。その結果、イベントと選手たちは、まるで資本主義の企業が利用する商品のようになり、そのままだ商品として扱われる。スポーツは、莫大な利潤を生み出し、大衆消費のために、市場で売れる他のすべての商品と同じように生産、包装されて売れる。

第三、スポーツが、資本主義社会の最も重要なイデオロギーの表現という点で発見される。

第四、国家の領域がある。国家の官僚的な行政は、資本家の理解を代弁する。これによって、スポーツに対する国家の介入は、すべてのスポーツの参加を資本主義の体系の要求とつなげようとする試みとみなす。」³⁾

このような Hargreaves の議論は、スポーツを Marx が言うイデオロギー的なものと考えているようだ。しかし、こうした四つの区分のみによって、スポーツを説明することができるとはいえない。それで、Marx の理論に基づき、スポーツに関する多様な研究が行われていたが、Hock の場合、スポーツと主流宗教との関連性について議論した。ところが、宗教に関しては、Marx の議論もある。Marx は、宗教が資本主義の便利なものにすぎないと指摘する。いいかえれば、宗教は労働者のエネルギーと感情を吸収し、一週間の労働に対する慰安を提供することによって、労働力の搾取を図るのである。Hock は、スポーツもこうした宗教のような意味を持つと述べる。つまり、宗教とスポーツは、

1) こうした分け方は、Cashmore, E. (2000) の話を参照した。

2) 形態社会学者 Dunning, E. (1999) は、Marx 主義に基づいた研究を、「対応の理論」と「再生産理論」にわけて説明している。「対応の理論」とは、スポーツが単純に資本主義の反映物であるということ、「再生産理論」とは、文化とスポーツはその特殊性によって、つまりその相違と自律性によって資本主義的な生産方法、および支配的な社会関係に関係しているということだ。

3) Hargreaves, J. *Sport, Culture and Ideology*, London : Routledge & Kegan Paul. 1982, p41.

一時的に苦痛を鈍くする麻酔薬として作用し、虚偽の幸福感を与えるものであるという⁴⁾。

それから、Marx 主義者の中で、スポーツの社会的機能を最も批判的な観点を提示した人は、Brohm であると思う。Brohm は、『スポーツ：計測される時間という監獄(*Sport : A prison of measured time*)』という本を通じて、現代スポーツに対する自分の立場を述べる⁵⁾。彼は、制度化され、高度に組織化された現代スポーツの構造が資本主義の利益集団によって形成されており、自由ではなく拘束を表象していると主張する。彼は、スポーツが見かけ上、多様な抑圧的イデオロギー機能を果たすものとみなす。例えば、スポーツは見せかけの逃避的感覚を提供し、それによって疎外された存在に対する補償機制として機能しており、プレイに対するリビドー的なポテンシャルを労働に対するポテンシャルに変換させることによってエロスという革命的ポテンシャルを低下させる。さらに、スポーツは象徴的に強権的国家にむすびついており、その正当性の再生産を助長するものであると述べる。

また、Rigauer は、『スポーツと労働(*Sport and Work*)』で Brohm の基本仮定に同意しながら、企業がどのようにスポーツに浸透して、スポーツを完全に乗り取ったかについて批判する。彼によると、まるで一つの階級がスポーツを着服し、全体階級の構造の中で既に掌握している支配的位置を補強するために、スポーツを利用するとみなしている。Rigauer は、「スポーツが労働者たちの健康を増進させ、病気から発生する労働損失時間を極小化することによって、経済システムを援助している」⁶⁾と主張する。

このように、Marx 理論に基づいてスポーツを議論する際、全ての面で人間は受動的な麻薬中毒者として描写される。しかし、こうした議論は、あまりにも決定論的な解釈にすぎない。すなわち、人間のより能動的な側面に関する議論もあり得るが、この点に関して完全に無視してしまったのである。

Marx 主義者である Hargreaves は、スポーツのより多面的なところに注目する。スポーツが広範な範囲でイデオロギーとして機能し、労働階級のエネルギーを閉じ込めかねない。しかし、スポーツは、ある意味で共通の目標を持ち、一緒に集まった労働階級集団の内部で連帯性を構築する可能性もあり得る。Hargreaves は、「歴史的に雇用主たちに対する痛烈な敵対の基礎を形成したのが、このような

類型の連帯である」⁷⁾と述べる。Hargreaves は、スポーツが疎外された大衆秩序に対する代理満足のみを提供し、その疎外を永続させるものであるという観点に反対する。彼が提示するものは、より柔軟で自発的な解釈である。つまり、スポーツが現象の維持に寄与することもあるが⁸⁾、それを通じて連帯の基礎を提供することによって、支配集団に対する抵抗の機会を与えることもできる。こうした Hargreaves の議論は、上述した Brohm 流の Marx 理論家のスポーツ解釈とは異なる。すなわち、Marx の理論を基本にするのは、同じと考えられるが、人間の能動的な側面にも注目しているのである。

一方、このような Marx の理論を踏まえながら、上述した解釈とは異なるパースペクティブを提示する研究もある。いわゆる、Gramsci のヘゲモニー論に基づいたものである。ヘゲモニー理論によると、スポーツは保守的なものになり、転覆的なものになる内在的な要素などを持っていない。つまり、スポーツは、本質的属性を持っていない。資本主義の中でスポーツは、事物の既存秩序を裏付けられている。Gruneau は、スポーツが制度的形態でより構造化していくことによって、参加者を解放させるのではなく、より拘束し、規制するものの、スポーツの解放的な側面に自発性、表現の自由、美学的な美しさなどがあり、政治的にはスポーツの連帯を通じ、女性運動、市民権運動、また不平等に対する他の類型の抵抗に寄与することができると主張する。Cashmore は、このようなヘゲモニー理論について次のように評価している。

「……労働階級の中でスポーツに対する熱狂は、社会秩序を支持させた。娯楽のためにスポーツに集まった労働階級は、スポーツの価値と原則に同化された。ところが、その価値と原則の多くは、全体社会の価値と原則に完璧にあてはまるものであった。……ここで忘れてはいけない事実は、全ての資本主義システムには収入と富、威信などの分配において、巨大に構造化された不平等が存在しており、この不平等が貧しい者より金持ちを好んでいることが相続体系を通じ、次の世代に複製されていく点である。ヘゲモニー理論家たちは、階級構造の下にいる人々が、この点を常識的なものとしてみなしているところに注目している。つまり、彼らは、自分にとって地位のみを与え、体系に対する

4) Hoch, P. *Rip off the big Game : The exploitation of sports by the power elite*, New York : Anchor Doubleday, 1972.

5) Brohm の議論は、Gruneau, R.(1983)の議論を参照した。

6) Rigauer, B. *Sport and Work*, New York : Columbia University Press, 1981.

7) Hargreaves, J. *Sport, power and culture*, Cambridge : Polity Press, 1986. = 佐伯聰夫、阿部生雄 共訳、『スポーツ・権力・文化』、不昧堂出版、pp.134-135.

8) スポーツが社会の統合や秩序の維持に寄与する立場は、いわゆる構造機能主義の観点からの主な研究テーマであった。Coakley(1978)を参照のこと。

絶え間ない質問を提起しないのだ。……」⁹⁾

Cashmore は、社会の中でスポーツがヘゲモニーの機能を果たしていることを強調している。ヘゲモニー理論家たちは、スポーツもヘゲモニーの一種であると考えている。Cashmore のようにスポーツが持っているヘゲモニー性を批判的観点から議論した研究者には、Naison と Stoddart がいる。この二人は、Gramsci のヘゲモニー概念に基づき、帝国を維持することにおいて、スポーツのヘゲモニーが遂行する役割を研究した。二人は、スポーツを文化権力の手段とみなす。すなわち、スポーツは直接的な政治権力の手段ではないということだ。

Naison は、「スポーツを通じて、軍事力ではなく、文化的力で植民地を支配したことについて例証した。Naison によると、徐々に増えている運動競技イベントは、アメリカ帝国主義の力学を反映したと述べる。戦後アメリカの政治・経済は国際化された。それによって、消費主義から軍事的な体制にわたって、アメリカの顕著な文化的価値の多数が組織スポーツの統合的な部分に浸透した」¹⁰⁾という。スポーツは、アメリカの価値や理念を人々に注入し、アメリカに対する適応手段を提供した。スポーツの人気は、アメリカが自国の文化価値に対する追従を成功的に転移させたということだ¹¹⁾。

一方、Stoddart は、「スポーツを通じて、イギリスの支配的な信念が社会的行動、標準、関係、そして順応性などに転移された。そして、こうした現象は公式的帝国主義が終結されても相変わらず持続された」¹²⁾と述べる。Stoddart はクリケットに関して記述しているが、彼の議論は、他のスポーツにも適応できると主張する。「クリケットあるいは競技をすることは、実際単純に一つの競技に参加することを超え、正直で率直になることであり、慣習の中で順応性を受け入れることだ。」¹³⁾

こうした議論に注目すべきところは、軍事力による強制的支配があまり効果的ではない場合、つまり、植民地住民に殖民統治が適的なことであると説得できれば、ホスト国にとっては、スポーツが便利なものになるということだ。スポーツは、植民地統治を容易にする価値や理念を人々に注入する方法を提供し、「アメリカ帝国主義に対する適応手段を提供した。スポーツの人気は、アメリカの文化と価値に対する追従が成功的に転移されたことをみせてくれ

る¹⁴⁾」。

しかし、Naison と Stoddart の議論は、イギリスとアメリカの統治に対する受動的受容のみを示唆した研究ではない。二人は、アメリカやイギリスから各植民地に導入されたスポーツが、実力の向上によってホスト国のレベルを超えるようになり、全体的には同等性の象徴になったと解釈している。

さて、Marx の理論に基づいた議論は、ナショナル・アイデンティティの問題を考慮する際、スポーツ、特に観戦型スポーツは、国民のナショナル・アイデンティティの再生産に大きく寄与したという。Hargreaves は、次のように述べる。

「……メディアは今日、ナショナル・アイデンティティを再生産する確かに最も重要な機関である。特に1950年代以降、国際的なイベントのテレビ放映の拡大に伴って、メディア・スポーツは人々がスポーツを通じて国と一体化する機会をますます提供するようになっていく。……政治的な話題において、メディアの言説でしばしば喚起される「ナショナル・インタレスト」の観念は、「我々」の競技者もしくは代表が国際的な行事でメディアの注目の的となると、メディア・スポーツの言説の中に持ち込まれる。……支配集団の象徴機能は、ただ単に純粋に自然発生的な形態で伝達されるのではなく、労働者階級や他の従属集団のナショナル・アイデンティティの感情への順応を具現化する国民を作り上げることに溶け込んでいる。」¹⁵⁾

こうした解釈は、ナショナル・アイデンティティの再生産に関する有効な見方ともいえる。しかし、このような観点に基づいてナショナル・アイデンティティを分析することは、とかく構造主義による決定論的な解釈に陥る可能性もある¹⁶⁾。いいかえればこうした観点は、本質主義(原初主義)から派生するナショナル・アイデンティティの問題をうまく説明することができないかもしれない。

3. Weber 理論に基づいた議論

Marx と Marx 理論家たちは、人間の社会的生活において、物質的、経済的あるいは生産的要素の役割を強調した。

9) Cashmore, E. 2000, pp. 96-97.

10) Naison, M. *Sports and the American empire*, Radical America, vol. 6, no. 4 (July / August), 1972, p. 96.

11) Ibid, p. 100.

12) Stoddart, B. *Sport, cultural imperialism and colonial response in the British empire*, Comparative Studies in Society and History, pt. 30 (October), 1988, p. 651.

13) Ibid, p. 653.

14) Naison, M. 1972, p. 100.

15) Hargreaves, J. 1986, pp.212-213.

16) これに関する議論は、後述する。

Weber は、このような立場を認めながらも、個々人の観念や信念が重要な役割を果たしたと考えた。勿論、こうした役割が孤立したものではなく、Marx が強調した物質的要素との結合によって遂行される。Weber は、分析の焦点を行為者にあわせたのが大きな特徴である。彼の重要な関心は、行為者が特定の社会—歴史的な脈略で相互指向する状況の中で、行為者に付与された主観的意味にあった¹⁷⁾。Weber によると、意味が欠けている行動は社会学の探求の対象にならないと主張する¹⁸⁾。ところが、Weber の理論に基づいてスポーツを論じた研究は多いとはいえない。しかし、いくつかの研究は Weber の思想を背景としている。このようなスポーツ研究にもとを提供したのは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』といえる。Weber は、近代資本主義の成立がヨーロッパとアメリカにわたってプロテスタンティズムの倫理の拡散による結果であると述べる。プロテスタンティズムの倫理が資本主義を起こしたということではない。しかし、プロテスタンティズムの倫理の原則と価値、それから初期資本主義の原則と価値などがお互いに相補的なものだったため、Weber は、両者の間で「選択的親和関係」を見つけ出した¹⁹⁾。16世紀に出現して、ヨーロッパとアメリカに拡散されたプロテスタンティズムの倫理は、価値と態度、行為などを網羅したものである。それは、合理的禁欲主義と目標指向、恒久性、節約、個人的成就、時間に対する意識、そして「天職(calling)」としての労働を鼓吹させた。いいかえれば、この倫理は、営利企業の出現と資本主義経済の出現に決定的な信念と行為を鼓吹させたのである。

それでは、こうした Weber のプロテスタンティズムの倫理に基づいた理論は、スポーツを分析することにどのような影響を与えたのか。ここでは、それに関するいくつかの先行研究に触れてみる。

Cashmore は、15、16世紀のヨーロッパ社会におけるスポーツの位相について論じ、歴史的背景を辿った。先ず、15世紀のルネサンス時期では、スポーツが単純な遊戯と娯楽であった。この時期のスポーツ行為は、楽しさが目的で勝利はあまり重要ではなかった。つまり、ルネサンス期の競技は、光栄や栄誉などが高い価値を具現するものではなかった。それは、単純な娯楽にすぎなかった。そして、こうした競技に対して、カトリック教会もある程度認める雰囲気であった。しかし、16世紀に入ると、プロテスタントの改革者である John Calvin の登場によって、スポーツ

に対する観念が変化するようになる。先ず、彼は、人間の行為が教皇の命令に服従することに代えて、人間が自らの靈魂を救えるし、そのようなプロセスで自分の世界を変化させると教える。Calvin は、人間の行為が神的な目的によって秩序付けられると主張する。彼は、規律、節制、それから肉体的快楽の回避などを重要視する。だから、カトリック教会である程度認めた遊戯的行為に対して、Calvin は徹底的に反対を表明した。したがって、プロテスタンティズムの倫理を受け入れた人々は、スポーツ的な行為に参加することが禁止された。ところが、時代が経つにつれて、プロテスタントたちは、スポーツ競技が持っている実用的な価値を強調したがっていた²⁰⁾。

一方、Turner は、プロテスタントたちにとってスポーツに対する認識の変化を次のように説明する。

「19世紀のプロテスタントたちが体育大会に熱狂したことが一度もなかった。……しかし、彼らは、体育行為が合理的動機を持っているとみなしているようだ。なぜならば、体育行為は、健康な身体と強引な性格を促進させており、規律と労働に慣れる健康な人口を生産することに役に立つからだ。」²¹⁾

すなわち、そもそも禁止された体育行為が合理化され、18世紀、19世紀になって新たなスポーツとして定着したのである。Overman も、『スポーツと娯楽に対するプロテスタント倫理の影響(*The Influence of the Protestant Ethic on Sport and Recreation*)』という本で、倫理の原則とスポーツとの間で起きる一連の衝突に注意をはらった。Overman は、この衝突を「合理化されたスポーツ」と呼んだ。ここで「合理化されたスポーツ」とは、スポーツが慎重に扱うべきであるという前提から構築されたことである²²⁾。過去無駄で、些少なものとみなされてきたスポーツがプロテスタントに容認されるようになって合理化されたのである。Overman は、過去のスポーツの行為は偶然的、即興的で勝手な性質を持っていたが、こうした合理化と決着しながら、現代の規制されたスポーツに非常に類似したものへと転換していったという。

ところが、スポーツが合理化され、現代的意味のスポーツに定着させるのに大きな貢献をしたのは、1860年代から登場したプロフェッショナリズムである。この時期からスポーツが変化し始める。例えば、訓練を監督するために専

17) このような Weber の観点は、Marx の理論と大きな相違点と考えられる。

18) Coser, A. L. *Masters of Sociological Thought*, New York : Harcourt Brace Jovanovich, 1977, p. 217.

19) このように資本主義とプロテスタンティズムとの関連性を議論したものが、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』である。

20) Cashmore, E. 2000, pp. 101-102.

21) Turner, S. T. *Max Weber : From history to modernity*, London : Routledge, 1992, pp. 120-121.

22) Overman, S. J. *The Influence of the Protestant Ethic on Sport and Recreation*, Aldershot : Avebury, 1997, p. 161.

門家が採用され、コーチとトレーナーは、適切に試合の準備をするように責任が負荷された。これはスポーツを慎重に受け入れ、合理的計画と体系的な手続きを踏まえ、自己規律を発揮させるということだ。こうした過程もプロテスタンティズムの倫理と類似した側面である。

一方、古代のオリンピックの場合、そもそも勝利を目指して競い合ったことではなく、参加者の光栄と矜持を図ることであった²³⁾。しかし、1924年のオリンピックからより目標志向的な接近が表れた²⁴⁾。これによって、競技の勝利は最も重要視された。そして、勝利のためにつらい労働と訓練での規律、それから実行における効率性などが要求された。さらに、記録を残すことが大事なことになった。すなわち、記録を測定する機械の登場によって、近代の競技は記録を残し、記録を破ることに対する試合を進行した。このような変化について Overman は、「プロテスタントのスポーツ精神は、スポーツを純粋な遊戯とは正反対の目標志向的行為管理に変形させることに成功した」²⁵⁾と述べる。こうしたスポーツは、1920年代に入ると、その意味と目標が完全に変わる。スポーツは、組織化、規律化されており、規則に従属させられた。過去の遊戯が持っていたスポーツの自発性と自由は、Weber の近代性の主要な特徴として取り上げた合理性に取って代わったのである。スポーツの意味が変わった。いいかえれば、勝利が唯一なものになったのである。そして、これは努力、忍耐、節制、自己統制などから導かれる成就を賞賛するプロテスタンティズムの倫理と一致することになったのである。

Weber が提示したのは、プロテスタンティズムの倫理が資本主義の発展で遂行した役割を説明したモデルである。彼は、スポーツを分析することが目的ではなかった。しかし、Weber の分析は、プロテスタンティズムの倫理がスポーツの再形成にどのように影響を与えたかを提示してくれる。つまり、人間の観念がスポーツの変形にどのような結びつきがあるのかを提示するのである。

4. Elias の形態社会学に基づいた議論

Elias の社会学的な観点は、その社会の「形態(figure-

tion)」の概念に根ざしている。この概念は、人々が、社会的に相互依存のネットワークにつながっており、権力関係が流動的であり、永久的な変化状態にある²⁶⁾ところに注目するのである。Elias は、社会の中で変形(transformation)を中心とする解釈にこだわる。彼は、「産業化とスポーツ化は、ヨーロッパ社会の深層の変形の兆候であった。その変形は、ヨーロッパ社会の個別構成員により規則的で分化される行為をするように要求した」²⁷⁾と述べる。ここで言う変形は、15世紀まで遡る。この時期に人間の行為を統制するための規則や規範が漸進的に導入され、特定の状況で適切な行為が何かを指示するようになった。また、規則を維持するために、非個人的組織が台頭した。このような変形は、ヨーロッパで相互依存性が拡大していく一般的な傾向を反映したのである。人々は、お互いを向ける行為が始まっており、自らの生存より他人の努力による依存性が生じた。こうした努力の課業は、専門化されており、限定した目標を狙った。時間が経ちながら、相互依存性の連鎖が形成された。分業の結果、各個人あるいは個々人の集団が無数の他人たちに重要な課業の成就を指向するようになった。次は、この無数の他人たちも重要な行為を遂行するようになり、こうしたプロセスを通して、社会の全ての構成員たちが他人に依存するようになった。結局、誰も孤立集団として残ることはなくなった。このように出現した関係の類型を形態と呼ぶ²⁸⁾。Elias は、形態の体系において、暴力の問題が生じ、これを効率的に運用するには、統制の必要が台頭したと解釈する。そこで国家が中心機構となり、内部的秩序や計画を担当した。Elias はこのような過程を説明することに文明化という概念を取り上げた。Elias は、『文明化の過程(The Civilizing Process)』を通じて、こうした過程を説明した。彼は、人間社会が暴力の使用を統制し、マナーの遵守を奨励する傾向に全面的な変化、あるいは進化を進めてきた過程について記述した²⁹⁾。Elias が文明化の出発点としたものは、古代ギリシャであった。ギリシャでは、国家の権力が増大し、それによって家族内部と近所の人、種族、領地などにおいて暴力に対する統制が増加することが文明化の進行であった。文明化の過程は、広範囲な世界的傾向であるが、全く同じ現象として生じたものではない。

23) 多木浩二、『スポーツを考える－身体・資本・ナショナリズム－』、ちくま新書、1995、p. 58.

24) Weber の社会的行為は、大きく四つの形態が存在する。一番目は、人間は意図的あるいは目標志向的な合理的行為である(目的合理的)。二番目は、人間の合理的行為が価値志向的なものである(価値合理的)。三番目は、情感的、情緒的な動機からの行為である。四番目は、伝統的行為である。Weber は、人間の行為が過去価値志向の合理性の支配から徐々に目的志向の合理性に支配されていくことを発見した(Coser, L.1977, p. 217.)。彼は、このような原因を近代化にあるとみなす。

25) Overman, S. J. "The Protestant Ethic," in *Sports Culture: An A-Z Guide* by E. Cashmore, London: Routledge, 2000, p. 338.

26) Giulianotti, R. *Football: A Sociology of the global game*, Polity Press, 1999. p. 44.

27) Elias, N. *An essay on sport and violence, in Quest for Excitement*, ed. By N. Elias and E. Dunning, Oxford: Blackwell, 1986, p. 151.

28) 形態(figuration)に関する説明は、Cashmore, E.(2000)を参照した。

29) Elias, N. *Über den prozess der zivilisation*, Francke Verlag, 1969. = 赤井慧爾、中村元保、吉田正勝 訳、『文明化の過程』、法政大学出版局、1977.

歴史的には形態が脱文明化され、野蛮な状態に後退し、暴力の行動を寛容した時期も多かった。Elias は、これを「逆ギア」と描写している。しかし、前進運動の形をもたらしたこともあって、こうしたケースを文明化の過程とみなした。彼は、文明化の過程における統制が、「ストレスと緊張」を惹起する要因として作用し、そこから組織スポーツの必要性が出てくると主張した。

「……実際に高度の文明化の基準にしたがい、物理的暴力に対する効果的な国家的/内部的な統制によって保護、維持される社会では、ある種の葛藤から生じる人々の個人的緊張、一言でいうと、ストレスと緊張が広範囲に存在している。」³⁰⁾

多くの人間社会は、自分自身が発生させたストレスと緊張に対応できる一定の方法（個々人にとって暴力に対する感情的な発生を抑制するための方法）を発展させる。Elias は、こうした人間行為について次のように述べる。

「こうした行為は、物理的暴力に対する高度の感性³¹⁾にしたがわなければならない。この高度の感性は、文明化の過程の後期段階にいる人々からみられる特徴的な社会的習慣（慣習と気質）である。」³²⁾

だから、人々が緊張をほぐす方法は、社会全体が認める基準を守る範囲で行われる。古代ローマ人は、野生動物が人間をひっかくことを観ながら、刺激的な楽しさを放出した。また、イギリスでは生きている猫を燃やしたり、雄牛をいじめたりすることで同じ経験を感じた。しかし、Elias によると、文明化の過程は、暴力を観ている人間に対して嫌悪感の限界を変化させたと言う。それで、今日ヨーロッパのいくつかの文化ではボクシングが耐えられないほどの暴力的だと感じるようになったという。人々が緊張感をほぐすために選んだ方法は、一般的な基準と感性を密接に反映したものであるという。こうした事例として、Elias は、狐狩りを取り上げている。もともとイギリスでは狐狩りがスポーツとして扱われた。18世紀後半、イギリスの独特なスポーツとして発展した狐狩りは、他の国や前の時代で行わ

れた狩り（より単純で、あまり規制的ではなく、より恣意的な）とはかなり異なる形態であった。Elias が言う形態の例である狐狩りは、エチケットの厳格な規定と特異なルールがあった。狩り中は、他の動物を殺してはいけないのがその例である。猟犬は、ひたすら狐の匂いのみを追いかけるように訓練され、猟犬に限って狐を殺せた。人間は、見守るだけだった。このような狐狩りで、Elias が注目したのは、規則やルールの登場が狩りの時間を延期させることに寄与しており、人為的に狩りの過程が伸びた。Elias と Dunning は、「狩りの興奮自体が徐々に参加者の楽しさの主要な源泉になった」³³⁾と主張する。一時期に屠殺行為の前段階であった狩りが快楽に取って代わったのである。参加のスリルは、追跡のペースと興奮、そして実際には殺さないのに、暴力が行われることを観るという快楽であった。Elias の議論での狐狩りは、文明化への加速傾向と暴力に対する内的な統制の解決策であった。以前の快楽的満足の源泉であった興奮の領域が閉鎖されて、人間は代理の行為を探し始めた。その領域は、危険や危機ではないものであり、社会全般にわたって容認されない露骨な無秩序を同伴しないものしかいけなかった。すなわち、興奮の追求であった。Elias にとって、狐狩りは一つの例であった。つまり、Elias は、現代スポーツの全てが独特な特徴を含んでいるモデルと思った。ボクシング、サッカー、クリケット、ラグビーなどのような他のスポーツは、比較的に秩序を持つ方式で進化しており、組織と効率性を強調する現代官僚社会の必要に符合するものだった。すなわち、それは全般的に文明化の過程と調和することとみなしたのだ。Elias のスポーツに対する議論は、スポーツを分析する理論的枠組みとはいいがたい。むしろ、彼の場合は、文明化の過程の本質とその結果を理解しようとする試みではないかと考えられる。しかし、彼が工夫した形態社会学は、後ほどレスター学派の主な方法論として定着した³⁴⁾。

レスター学派者である Dunning は、形態社会学の利点について次の四つを取り上げている。第一、形態社会学は、余暇における感情が果たす中心的な役割に相応の注意を払う。第二、それは、経験的な探求との不断の融合によって、概念、仮説、理論を発展させようとする。つまり、経験的なものと同じく必要とされる過程であり、そのどちらも優

30) Elias, N. *Quest for Excitement*, By N. Elias and E. Dunning, Oxford : Blackwell, 1986, p. 41.

31) ここで言う感性 (sensitivity) は、暴力に対する統制の感覚である。

32) Elias, N. 1986, pp. 41-42.

33) Ibid, p. 166.

34) 1980年代以来、イギリスのサッカー・フリーガニズムに対する論争の主な貢献者は、Eric Dunning, Patrick Murphy, John Williams, Joe Maguire, Ivan Waddington などを中心になったレスター大学の社会学者だった。彼らの研究は、ファン暴力に対する政治的・社会的な関心が高まった際、旧アメリカ社会科学研究協議会 (Social Science Research Council) とサッカー基金 (Football Trust) から財政の支援をもらった。レスター学派 (Leicester School) という名称は、サッカー社会学でこの学派のヘゲモニーを認めるために、またこの学派の理論的観点と研究方法および結論に対する一貫性を明らかにするため、他の人々がつけた名称である。この学派の主な観点は、スポーツを Elias の形態社会学から説明したことである。

秀になるのを許されない過程である。第三、それは、「労働と余暇」、「肉体と精神」などのような伝統的な二元論への無思慮な専心の結果として生じることになる過度の単純化、歪曲を避けようとする。第四、それは、知識を増加させる企図に関連し、社会学の研究において短期的研究の圧力、それに対する不安や配慮からの距離化の度合いを最大限にしようとする³⁵⁾。

こうした Elias の形態社会学は、他の研究者たちから様々な批判も多く受けている。方法論的に Elias の形態社会学は、十分な理論を提供したのではなく、実証が難しく、単純な描写の連続であるという批判がある。多くの歴史学者と人類学者は、Elias の「文明化の過程」という概念が歴史的に不正確であり、進化論的で人種中心である点、それからこの概念は初期あるいは非産業的社会が低開発であり、残酷で野蛮という意味であると主張する³⁶⁾。

本研究の主なテーマであるナショナリズムの問題に関連しても、Elias の形態社会学は、大きな弱点がある。先ず、形態社会学の理論は、近代化におけるスポーツの発展が国家という機構の暴力の独占をそのまま認めることになる。それから、スポーツの普及が国民にナショナリズムの高揚に大きな貢献をしたことに関しては、ほぼ論証の対象にならなかったのである。

5. むすびにかえて

上述した三つの観点を簡単にまとめると、一番目は、スポーツと社会構造との関係に取り組んだもの、二番目は、人間の信念と価値がスポーツに影響するもの、三番目は、この二つを同時に扱う折衷するものといえる。しかし、現代の社会でスポーツを分析することにおいては、より多様な論理的構造が求められる。ここでは、Pierre Bourdieu のハビトゥスの概念を用いることを対案として提示する。Bourdieu の理論を提示する理由は、ハビトゥスが持っている二重性にある。つまり、Bourdieu のハビトゥスは、人間の内的な要素と外的な要素を同時に説明できる理論である。いいかえれば、ハビトゥスは、個人の行為と社会構造を体系的に媒介しようとするものである。ハビトゥスは、われわれの意図した行為が意図しなかった構造を実現する。また、どのようにわれわれの行為の結果である構造が逆にわれわれの日常的行為を規定する力として作用するかを説明する概念である。すなわち、ハビトゥスは構造の産物であり、同時に構造を実現することでもある。このような観点は、例えば、スポーツを分析する際、ナショナルなものとの関係を究明する場合に有効になるかもしれない。

なぜならば、ナショナルなものが持っている内的な要素(本質的なもの)と外的な要素(構造的なもの)を同時に扱いながら、分析することができるという可能性がみえてくるからだ。こうした研究は、今後の大きな課題でもある。

@参考文献

- 多木浩二、『スポーツを考える－身体・資本・ナショナリズム－』、ちくま新書、1995。
- Bourdieu, P. *Le Sens Pratique*, Paris : Les Editions de Minuit, 1980. = 今村仁司、港道隆 共訳、『実践感覚』、みすず書房、1988。
- Cashmore, E. *Making sense of sports*, London: Routledge, 2000.
- Coakley, J. J. *Sport in society*, Mosby, 1978. = 影山健 訳、『現代のスポーツその神話と現実』、道和書院、1981。
- Coser, A. L. *Masters of Sociological Thought*, New York : Harcourt Brace Jovanovich, 1977.
- Dunning, E. *Sport Matters : Sociological studies of sport, violence and civilization*, London : Routledge, 1999. = 大平章 訳、『問題としてのスポーツ』、法政大学出版局。
- Elias, N. *An essay on sport and violence, in Quest for Excitement*, ed. By N. Elias and E. Dunning, Oxford : Blackwell, 1986.
- Elias, N. *Quest for Excitement*, By N. Elias and E. Dunning, Oxford : Blackwell, 1986.
- Elias, N. *Über den prozess der zivilisation*, Francke Verlag, 1969. = 赤井慧爾、中村元保、吉田正勝 訳、『文明化の過程』、法政大学出版局、1977。
- Giulianotti, R. *Football : A Sociology of the global game*, Polity Press, 1999.
- Gruneau, R. *Class, Sports, and Social Development*, University of Massachusetts Press, 1983. = 岡田猛、多々納秀雄、菊幸一 共訳、『スポーツの近代史社会学』、不昧堂出版、1998。
- Hargreaves, J. *Sport, Culture and Ideology*, London : Routledge & Kegan Paul, 1982.
- Hargreaves, J. *Sport, power and culture*, Cambridge : Polity Press, 1986. = 佐伯聰夫、阿部生雄 共訳、『スポーツ・権力・文化』、不昧堂出版、1993。
- Harker, R. Mahar, C. Wilkes, C. *An Introduction to the Work of Pierre Bourdieu*, Macmillan Press, 1990. = 滝本往人、柳和樹 共訳『ブルデュー入門』、昭和堂、1993。
- Hoch, P. *Rip off the big Game : The exploitation of sports by the power elite*, New York : Anchor Doubleday, 1972.
- Mennell, S. *Norbert Elias: an introduction*, Oxford : Blackwell, 1989.
- Naison, M. *Sports and the American empire*, Radical America, vol. 6, no. 4 (July/August), 1972.
- Stoddart, B. *Sport, cultural imperialism and colonial response in the British empire*, Comparative Studies in Society and History, pt. 30 (October), 1988.
- Overman, S. J. *The Influence of the Protestant Ethic on Sport and Recreation*, Aldershot : Avebury, 1997.
- Overman, S. J. "The Protestant Ethic," in *Sports Culture : An A-Z Guide* by E. Cashmore, London : Routledge, 2000.
- Rigauer, B. *Sport and Work*, New York : Columbia University Press, 1981.
- Turner, S. T. *Max Weber: From history to modernity*, London : Routledge.
- Weber, M. *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalis-*

35) Dunning, E. *Sport Matters: Sociological studies of sport, violence and civilization*, London : Routledge, 1999. = 大平章 訳、『問題としてのスポーツ』、法政大学出版局、p. 63.

36) Mennell, S. *Norbert Elias : an introduction*, Oxford : Blackwell, 1989, p. 230.

mus, 1920. = 大塚久雄 訳、『プロテスタンティズムの倫理
と資本主義の精神』、岩波文庫、1989.

A Study on the Sociological Theories on Sport Analysis

OH HYUN SUK

This paper examines how sports have been examined within the field of sociology. It looks at it from the following three stand points. First, analyzing sport based on the Marx theory, then based on the theory of Weber and finally based on the theory of Elias. Lastly, the theoretical validity of these analyses will be discussed based on the habitus of Pierre Bourdieu.